

## 原采蘋と房総の漢詩人

—「東遊漫草」に見える交流—

小谷 喜久江

日本大学大学院総合社会情報研究科

### Hara Saihin and Bōsō Region Kanshi Poets

—Fellowship among Poets as Viewed through Saihin's "Tōyū Mansō"—

KOTANI Kikue

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

Hara Saihin is one of the most famous female kanshi poets of the late Edo period. She was raised as a daughter of an official scholar of the Akizuki domain in Fukuoka. As a child of the scholar, she was educated in Chinese literature from her childhood. The father, Hara Kosho, also a famous kanshi poet, had an ambition for Saihin to be a poet because of his son's frailty. At age 30, after her father's death, she finally left her hometown for Edo. While living there for 20 years, she traveled around the Kanto region, teaching Chinese literature and correcting poems. "Tōyū Mansō" is her diary of her second journey to the Bōsō region in 1847-1848. There are over 90 poems in the diary, some of which have never been published. These poems reveal how Saihin was beloved and respected by local poets. The poems also express her nostalgia for her home town and her mother. In the late Edo period, a women traveling by herself was very unusual. Saihin is the only historically known female kanshi troubadour of the Edo period.

In this thesis I will show how Saihin was idolized by these local poets and how she established her fame while traveling in the Bōsō region. It will become clear, at the same time, that the Bōsō region kanshi poets were members of an affluent and cultured regional society that existed outside Edo.

---

#### 1.はじめに

江戸時代、文化文政期の文化の興隆は、漢詩文学にも隆盛をもたらした。この傾向は江戸だけでなく、地方の各藩における文教政策によって裾野が広がった知識階級の嗜みとして全国に広がった。本稿で取り上げる原采蘋も、九州福岡藩の支藩である秋月藩という小さな藩の儒者の娘である。このころの九州詩壇は隆盛を極め、福岡藩は天明三年、儒者竹田定良、亀井南冥に命じて学問所を開かせ、翌四年には東学問稽古所修猷館、西学問稽古所甘棠館として開館することとなった。本来の貝原益軒の流れをくむ、朱子学を講じる東学問所に加え、新たに西学問所として徂徠学派の亀井南冥を擁立し、采蘋の父原古処、日田の広瀬淡窓などの優秀な門下生を輩出した。亀

井塾の名は九州のみならず、中国地方にも知られ、門弟も各地から集まった。後に頼山陽や梁川星巖などは九州遊歴の際必ず亀井家を訪れている。

このように九州の地は長崎という貿易港を控えて、漢詩文学の流入に最も近い位置にあったといえる。

このような条件下で育った采蘋は亀井南冥の孫小琴とともに漢学を学んで成長した。独立した漢詩人として成功するために、文政十一年、単身江戸に出た采蘋は文政十二年と弘化四年～五年の二度にわたって房総各地を遊歴している。この時代は柏木如亭に代表される遊歴詩人が各地を歴遊し、地方の知識階級や、富豪相手に詩の添削や漢学の講義をして生計を立てていた。梁川星巖も柏木如亭に心酔し、妻の紅蘭同伴で各地を遊歴して回った。大沼枕山は天

保八年以来毎年、梁川星巖と紅蘭は天保十二年の3月から7月まで房総を遊歴している。また大沼枕山を含めた星門四傑とうたわれた遠山雲如、嶺田楓江、小野湖山等も天保八～十年あたりにそれぞれ房総を訪れている。遠山雲如に至っては、九十九里に十年間も住んだという。このように江戸に近い房総には江戸に拠点を置く文人が多く訪れていた。

采蘋の二回目の房総遊歴の記録は「東遊漫草」として自筆本が秋月郷土館に所蔵されている。これまで山田新一郎氏や前田淑氏<sup>1</sup>らの研究者によってこの日記の解説がなされているが、自筆本と照らし合わせてみると、詩の題が異なっていたり、掲載されていない詩も多くある。このことは他の写本が伝わっていたことを意味するのかもしれないが、秋月郷土館蔵の自筆本以外の「東遊漫草」はいまだ管見にはない。『日本儒林叢書』にある「采蘋詩集」は「東遊漫草」中のほとんどの詩を収録しているが詩の題が自筆本と異なっていたり、間違いも指摘されている。<sup>2</sup>前記の「采蘋詩集」は井上哲次郎氏の所蔵本である写本を基に関儀一郎氏が編集したものとされるが、都立中央図書館に所蔵される「井上文庫」には写本は見当たらない。本稿では「東遊漫草」の全貌を紹介するとともに、采蘋と房総の文人たちとの交流を通して、江戸末期の房総詩壇の様相と漢詩人としての晩年の采蘋像を明らかにしたいと考える。

## 2. 原采蘋について

### 2.1 生い立ち

原采蘋は寛政十年(1798)、九州福岡藩の支藩である秋月藩の藩儒、原古処の娘として生まれた。名は猷、またの号を霞窓とも言った。兄に瑛太郎白圭、弟に謹次郎鳩巢がいたが、二人とも病弱で、若くしてこの世を去っている。そのため父古処の期待は健康で、才能豊かな一人娘采蘋にかかることとなった。

<sup>1</sup>前田淑氏の論文「閩秀詩人 原采蘋と『東遊漫草』」(『江戸時代女流文芸史』笠間書院、1999)は本文中の記録に依れば、山田新一郎氏のメモ書きを元にし、原本である『東遊漫草』は見つけることが出来なかったとある。

<sup>2</sup> 福島理子『江戸漢詩選 第三巻「女流」』岩波書店、1995参照。

秋月藩の学問は安永四年、七代藩主黒田長堅の時「始テ学校ヲ設ク原百助教授タリ」<sup>3</sup>とあり、原古処の養父百助(坦斎)の時に藩校「稽古亭」が出来た。坦斎は貝原益軒の門人である竹田春庵父子に従学し、朱子学を講じていたが、本藩の福岡藩では天明四年(1784)、西学問所が開設され、亀井南冥が徂徠学を講じることとなった。古処の父坦斎は、朱子学者である恩師の竹田春庵が教える東学問所修猷館ではなく、荻生徂徠派の古文辞学者である南冥の門下に古処を入門させた。この背景には九州地方における徂徠学の流行と南冥の実力があつたと考えられる。

天明七年、父坦斎老衰のため隠居、古処は原家の家業である儒者を継いだ。寛政八年には藩校稽古観の助教となり、寛政十二年(1800)、教授となった。これは天明五年、高鍋の秋月家より秋月藩の黒田家に封襲された八代藩主黒田長舒の推挙に依るものとされ、秋月藩の学問は、上杉鷹山の甥にあたる長舒の藩学振興の政策を受けて最盛期を迎えた。<sup>4</sup>古処の儒者としての人気も高まり、門弟も多く集まったことから、長舒は新たな家を古処に与え、十分な門弟を収容できるように配慮した。古処はその家塾を古処山堂と命名し、多くの門弟を教授した。文化四年、長舒は書画御覧の名目で二人の公子を伴い、古処邸を訪問し、妻子にも面会するなどの榮譽も与えている。

このように原家の家運は上昇期にあり、少女時代の采蘋は門弟から「采蘋さま」と尊敬される存在であった。また、南冥の息子昭陽と古処とは盟友であり、昭陽の娘小琴と采蘋は同年ということもあり、2人の交流は父親を介して頻繁に行われた。この交流は詩文の交換であったり、またお互いの習った漢籍の事など、儒者の娘としての教養をお互いに刺激しあうものであつたと思われる。采蘋にとって小琴はよきライバルであった。小琴も漢詩や絵を残しているが<sup>5</sup>、父親の望み通り結婚し、詩作は独身時代に作った詩をまとめた『窈窕稿 乙亥』が残るのみで

<sup>3</sup>文部省編『日本教育史資料』臨川書店、1969。

<sup>4</sup> 秋月藩は寛政異学の禁に対して表向きに、京都より山崎派の小川才次を招いて寛政四年～九年まで稽古観教授としている。

<sup>5</sup> 前田淑『江戸時代女流文芸史』笠間書院、1999。

ある。小琴の才能はむしろ絵の方にあったと思われる、晩年に至るまで絵を書き続けている。<sup>6</sup>一方采蘋は16歳の時、福岡藩医香江氏との縁談があったが、破談になった。文化の最も華やかな時代に少女期を送った2人の人生は後年大きく異なってゆく。

## 2.2 漢詩人としての修業

原古処は藩主黒田長舒の厚遇を受けたが、長舒は文化四年に死去し、翌年長韶が九代藩主となる。しかし長舒の意向は長韶にも受け継がれ、御納戸頭まで出世し、文化七年と文化九年には、藩主長韶の相伴で上京し、江戸に滞在した。采蘋はこの時13歳から15歳の娘になっていた。文化七年から九年ごろの江戸詩壇は荻生徂徠の古文辞格調派の詩風は影をひそめ、山本北山の『作詩志穀』によって明代の清新性靈説が導入されていた。古文辞派の格調高い詩風はもともと士大夫や知識階級の嗜むものであったが、明代の詩は作りやすく、大衆にも親しまれる要素を持っていた。そのため漢詩の流行を促し、菊池五山のように詩の評論集『五山堂詩話』をほぼ毎年出版し、作品の掲載料を徴収して生計を立てるビジネスが成り立っていた。こうしたやり方は、地方の豪農や医者といった文芸愛好者の詩作への欲求を促進することに一役を担った。

江戸滞在中の古処は積極的に江戸の漢詩人たち、たとえば大沼竹溪<sup>7</sup>や菊池五山など当時の一流の詩人たちとの交流を計り<sup>8</sup>、秋月での不足を埋めようとした。古処はこの経験を若い采蘋に逐一報告し、書籍も送っている<sup>9</sup>。この時点ですでに古処は、采蘋の将来を江戸に思い描いていたことが手紙の文面から窺える。

しかし、順風漫帆に見えた父の出世は文化九年六月、「思召に不叶候儀有之退役被仰付候」と言い渡され、さらに九月には「家業御免、平士に被仰付」と

いう命が下され、儒者としての家業にも終止符が打たれた<sup>10</sup>。翌年、家督は長男の瑛太郎が継ぎ、馬廻組として百石の家録を引き継いだ。退役後の古処は詩人としての生涯を旨として、妻子を伴い九州・山陰地方を旅し、各地の詩人との交流を楽しんだ。また古処は多くの旅に采蘋を同行させ、各地の詩人に紹介し、詩の応酬をさせることで詩人としての力量を磨かせた。18歳から始まった父に同行した遊歴は約10年間に亘った。九州各地、あるいは四国地方の詩会の席で、管茶山や頼杏坪、広瀬淡窓らの著名な詩人に紹介され、詩の応酬をしたことは、それらの詩人の日記に采蘋の詩才をほめたたえる記録として残っている。<sup>11</sup>

また古処は、生活のために文化十四年(1817)に筑前甘木に詩の結社「天城詩社」が結ばれ、その盟主となった。ここは地方詩人の交流の場となり、また地域の子供たちの育成の場ともなったが、采蘋は父の留守中には秋月にある家塾の代講を勤めるまでに成長し、天城詩社と家塾の両方で父を助けている。

江戸に出発する前の最後の旅となったのは文政六年(1823)の長崎旅行である。佐賀を経て長崎に入った古処一行は柳篔池館に滞在し、采蘋は詩書を講じながら、清客らと盛んに詩の応酬をしたようであるが、その時の様子を「長崎書感」と題して兄の白圭に次のような詩を送っている。「詩鋒筆陣寥として競ふ無く 辮髪禿頭椎として文少なし」。長崎には漢詩の本場である中国の人たちがいると噂には聞いていたが、実際に経験してみると、思ったほど実力がなく、自分の競争相手になるものは一人もいないと自負している。中国人と詩の応酬をするために多くの詩人が長崎を訪れており、後には頼山陽や梁川星巖等も訪れている。

半年間の長崎滞在の様子は古処から秋月にいる家族に宛てた手紙に詳しく書かれている。それには「采蘋珍敷趣にて定て大評判と被存候追々知音も多人数、

<sup>6</sup> 庄野寿人『閨秀 亀井少榘伝』(財) 亀陽文庫・能古博物館、1992 参照。

<sup>7</sup> 大沼枕山の父。

<sup>8</sup> この時、菊池五山は『五山堂詩話』の6巻までを出版していて、第8巻には古処を登場させている。

<sup>9</sup> 文化9年5月4日の采蘋宛ての手紙に「手習見事ニ出来上り候ハ、出世も出来可申候」とある。

<sup>10</sup> ここに至る詳しい経緯は第7章「近世の文化」(『甘木市史』上巻、1982)を参照のこと。

<sup>11</sup> 文政3年の広瀬淡窓の日記「懐旧樓筆記」(『淡窓全集』日田郡教育会、1925)に「幼ヨリ読書文芸ヲ学ヒ、尤詩ニ長セリ。其行事磊々落々トシテ、男子ニ異ナラス。又能ク豪飲セリ」とある。

昨今に相成り候ては振舞案内に負け、今日杯は蘋也のみ西原後室同伴、福田安右衛門へ参申候」、また「世間の風説は随分沙汰宜敷由に御座候、才女長崎に遊候はみちを始と被存候」<sup>12</sup>とあり、父親の娘自慢も窺えるが、長崎で受けた采蘋の評判が十分覗い知れる。この旅行によって培った漢詩人としての自信は、最終目的である江戸への旅立ちを容易に感じさせたに違いない。

### 3. 「東遊漫草」について

「東遊漫草」は日記代わりに記録した詩集である。このスタイルは父親の古処が守り通したスタイルで、散文はふくまれていない。このあたりも父親を見習ったものと思われる。従って旅の行程は詩の内容から推測するほか方法はない。しかし、日記の最後には人名録のようなものがあり、どの地で誰に会ったかが記録されている。詩には現れない人物も多く記録されている。「東遊漫草」には全部で94首の詩が盛り込まれている。<sup>13</sup> 以下、詩と人名録を頼りに采蘋の辿った路を検証してみたいと思う。

#### 3.1 旅程と交流人物

采蘋の房総旅行は江戸に着いてすぐの文政十二年(1829)に上総から東回りで一回目を果たし、二回目は弘化四年(1847)から五年にかけて木更津から南下し、反対周りで江戸に帰っている。一回目の旅の記録は、焼失した可能性が高く、残されていないが、「東遊漫草」中の詩の中に18年前の追憶が散見されることから一回目の旅の旅程もある程度推測できる。<sup>14</sup> 采蘋が江戸に着いてすぐに房総の旅を思い立ち、実行に移すことが出来た経緯については今だその手がかりはつかめていないが、江戸での交友録を辿って行けば今後は解明できるものと思う。2回

目の旅についてはすでに江戸在住20年に及び、多くの友人・知人によって情報がもたらされたことは推測できる。

「東遊漫草」に見える訪問先は大沼枕山や梁川星巖の房総旅行の宿泊先とほぼ重っている。<sup>15</sup> 采蘋と星巖との交流は、采蘋父子が長崎旅行から帰郷後、同じく長崎を訪れた星巖が、そこで目にした采蘋の詩に驚いて、「讀采蘋女史閨詠却奇。采蘋向在長崎。開講肆。延生員。故詩尾及之。」の詞とともに七言律詩を采蘋に送ったことから始まっている。<sup>16</sup> それ以来采蘋は東遊の度に京都時代の星巖を2度訪問し、詩の添削を依頼している。また星巖は江戸に向かう采蘋に紹介状を書き、旅の便宜を図っている。大沼枕山との交流は、枕山の父竹溪と采蘋の父古処が知人ということもあり、又枕山は星巖の弟子でもあり、天保八年と九年に房総を訪れ、九年には房総の漢詩人鱸松塘がまだ15歳の少年で、彦之と呼ばれている頃出会い、お互い意気投合し、富士登山を果たしている。この後、彦之は枕山の勧めで星巖の門人となった。このように師弟関係を軸にした交流が江戸と房総をつないでいたことが知れるのである。

#### 3.2 日記中の詩と訪問先

日記中には94首の詩が書かれているが、完全ではないものも僅かに含まれる。以下にその詩の題と訪問先を挙げる。

##### 1、 「□□」<sup>17</sup>七言絶句

弘化四年の秋、江戸を出発し、木更津あたりから陸路を南下。木更津からの記録があるこの2回目の房総の旅はこの詩から始まっている。采蘋のメモによれば、木更津では浅川門<sup>18</sup>の遠山元水、字は貞伯と岡部藩士の近藤兼吉

<sup>12</sup>山田新一郎編、「第三巻 原采蘋先生小傳」(『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』) 秋月公民館、1951 参照

<sup>13</sup>吉木幸子『幕末閨秀 原采蘋の生涯と詩』甘木市教育委員会、1993年には「東遊漫草」の全編を掲げたとして19首の詩を載せているが、秋月郷土館蔵の自筆本には94首の詩が確認できる。

<sup>14</sup>脚注9に同じ。

<sup>15</sup>大沼枕山の『房山集』や梁川星巖の『浪淘集』には同じ場所で詠まれたと思われる同題の詩が見える。星巖の房総遊歴は采蘋とは逆のコースを辿っている。

<sup>16</sup>脚注9に同じ。

<sup>17</sup>自筆本は墨で消した跡があり解読不可。山田新一郎本は「赴房州途上」、また関儀一郎編「采蘋詩集」では「失題」となっている。

<sup>18</sup>浅川善庵か。

の二人と医者を生澤良仙に会っている。  
この詩は木更津～富津に至る海岸線と思われる場所が、山陰道に似ていると詠じている。富津では織本嘉右衛門、糟谷直輔、磯崎永助、小松貞吉(江戸人)、稲次作左衛門に会っている。織本家は代々名主で、小林一茶などとも交流があった。織本花嬌は俳人として名を成した。富津から天神山湊に出て、医者の上宗且を訪ねている。

- 2、「百ヶ岡」<sup>19</sup>七言絶句  
百首岡は現在の竹岡。<sup>20</sup>ここには富津台場の陣屋がおかれ、羽倉簡堂が海防の任にあたっていた。天保十二年に梁川星巖はここに羽倉簡堂を訪ね、七言絶句を贈っている。<sup>21</sup>采蘋はここで医者の上宗且を訪ねている。
- 3、「贈岩崎櫻齋」七言律詩一首、五言律詩一首  
岩崎櫻齋(1790～1881)は元名(鋸南町)の名主で、名を泰助といった。医師でもあり漢学や書にも造詣が深く、自宅に塾を開き、「蘭園書屋」と称した。鱸松塘は12歳の時ここで学んでいる。亀田鵬齋や梁川星巖夫妻も訪れている。
- 4、「垂釣」七言絶句  
元名から保田に出て、川崎温平、俗称善兵衛、に会う。ここで釣りを楽しんだものと思われる。
- 5、「訪平井又右衛門稱病不偶使予旅宿入夜有人稱平氏門人来話乞予詩文持去示主人予於枕上儀賦一絶」七言絶句  
平井家は勝山村(現鋸南町)の大名主で八代目世雄は中興の主と言われ、太田金城に学んだ。采蘋や星巖が訪ねたのは九代目行謹(1811～1867)で、名は鼎、字は言信、九代目又右衛門を継いだ。星巖夫妻がここを訪れたのは天保十二年(1841)六月であった。平井家は三男六女皆書を好み、女子までも文学を好んだ家柄であり、采蘋や星巖の訪問はこれらの

子女にとってまたとない好機であったろう。勝山では旅宿もしたようである。次に市部では小澤政右衛門に宿泊している。

- 6、「蓑丘招隱」七言律詩  
「蓑丘僊隱」という星巖の書いた額書があるという。<sup>22</sup>蓑丘は平群村(現南房総市)の医者、加藤霞石<sup>23</sup>の号である。霞石は名を済、字は世美と言ひ、蓑丘山人、掬靄山人とも号した。霞石は後の号である。本業よりも詩や書に憧憬が深く、長崎に遊学しているが、医業より文芸の方の収穫が多かったという。しかし長崎行きは功を奏した様で医業は繁盛し、文人の逗留を可能にした。「掬靄山房詩」一冊が残る。ここにも又星巖夫妻が10日ほど滞在し、先の額書や「掬靄山房詩碑」という書を残している。采蘋は弘化四年十月に数日滞在したようであり、長崎の話題に花が咲いたことであろう。この時霞石46歳。しかし掬靄山房の最初の訪問者は大沼枕山であり、その後多くの文人が霞石を訪ねている。
- 7、「懷人詩屋席上呈主人」五言律詩三首  
懷人詩屋は鱸(鈴木)松塘(1823～1898)<sup>24</sup>の書齋名。松塘は国府村谷向の眼科医の家に生まれたが、詩の才能に恵まれ、大沼枕山との出会いによって、梁川星巖に弟子入りし、明治期の漢詩人として名を馳せるようになる。松塘が東京で結んだ詩社は「七曲吟社」と言い、娘の采蘭や蕙畹を含めた女弟子が多く集まったことから、清の鴻儒俞曲園に「松塘の門下には女弟子が甚だ多く、隋園の風あり」<sup>25</sup>と言わしめたように、松塘の詩社はあたかも清の袁枚の詩社のようなものであった。采蘋が谷向を訪れた時は松塘25歳で、母と子のような関係を築いたと想像する。

<sup>19</sup>山田新一郎本では「百首岡」となっている。

<sup>20</sup>中世の百首城跡。

<sup>21</sup>鶴岡節雄『房総文人散歩・梁川星巖篇』千秋社、1977参照。

<sup>22</sup>鶴岡氏による。采蘋のメモには号「蓑丘招隱」とある。

<sup>23</sup>加藤霞石については安房先賢偉人顕彰会編『安房先賢偉人伝』国書刊行会、1981参照。

<sup>24</sup>『安房先賢偉人伝』参照。

<sup>25</sup>俞曲園が選集した『東瀛詩選』中で述べている。

- 8、 「留別」<sup>26</sup>七言律詩  
題名の通り鈴木松塘に対する留別の詩である。
- 9、 「十一月初四風雨訪景山氏」七言律詩  
鈴木松塘に別れを告げて、十一月四日園村(現館山市)の名主景山氏を訪う。景山与左衛門の書齋は含翠書屋といい、星巖の詩に「景山氏の含翠書屋を訪う」があり、大沼枕山の『房山集』にも「宿景山氏宅対酒無聊回作歌」という詩が見える。  
景山氏を辞した後、采蘋のメモには片岡村の名主小柴新右衛門を訪い、寶貝村では本橋次右衛門、号、文溟、名を名璞という人を訪ね、安東村では相川十左衛門、号を義長という人を訪ねている。また、ここでは丹波藩の宮澤胖、字は廣甫、号を竹堂という人に会っている。丹波藩の陣屋が安藤村にあったのであろう。
- 10、 「栗園招飲」七言律詩  
二子村(現館山市)の谷崎栗園は名を元良という医者であった。采蘋の詩によれば栗園は自ら手打ちそばを作り、新酒をふるまったという。又谷崎家には星巖の詩書が残されているという。<sup>27</sup>  
栗園は安政五年十月十五日没、星巖の没年と同じである。
- 11、 「贈琴嶺」七言律詩  
琴嶺は号で、池田屋と称した。名は金七。長須賀(館山市)の名主で鈴木松塘の友人。池田屋は現存している。
- 12、 「鏡浦」七言絶句  
鏡浦は館山湾を指し、長須賀からすぐの場所にある。采蘋は十八年前にもここを訪れ、若かった昔の自分の姿を懐かしみ、既に白髪の混じった今との差を詩に詠じている。  
館山では宗真寺というお寺にも泊まっている。
- 13、 「次韻加藤玄章」七言古詩  
加藤玄章は平群の加藤霞石の次男。この時
- 14、 「次韻水谷翼齋」七言絶句  
翼齋は号で、名は豊作。忍藩の学者で海岸防備のため北条鶴谷に勤務していた。ここには忍藩の陣屋があったという。翼齋の他に塩野専蔵、号を苔園という忍藩士にも会っている。
- 15、 「贈未亡人岩崎氏」七言律詩  
岩崎氏については不明。館山と洲野崎の間に家があったと思われる。未亡人の家の近くには姉妹が住んでいて、寒梅の園があったという。  
洲崎村では名主の渡邊仁右衛門<sup>28</sup>を訪ねている。
- 16、 「贈関谷林国手」五言律詩  
洲崎村では他に医者池田元章、名は貞、字は土揺、号を関谷林という人に会っている。国手は医者之意。詩に「同是西州客、相逢東海頭」とある如く、九州の人であったようである。また「佳兒君珍重、七歳氣吞牛」とあり、7歳の子がいたことがわかる。<sup>29</sup>
- 17、 「留別」七言絶句  
池田氏に対する留別の詩である。「学是同門国比隣<sup>30</sup> 三千里外始相親 歡留累月難離別 不奈臨行淚瀑布」。異郷に在って、同じ西国の人に会い、別れ難い思いが詩に込められている。  
洲崎の手前、波左間では糸我屋新平衡に会っている。ここには洲崎砲台の松が岡陣屋があり、白河藩士の墓が坂田の西方寺や波

<sup>26</sup>山田本では「留別鈴木松塘」となっている。

<sup>27</sup>脚注14に同じ

<sup>28</sup> 地元の人に依れば古くは「綿鍋」と書いたという。幕末、白河藩の松平侯が休憩したといわれる渡邊家の広大な土地は現在竹藪に覆われている。

<sup>29</sup>采蘋のメモに玄章の子は阿定とある。池田家は現在も子孫が住んでおり、家は新宅と呼ばれている。

<sup>30</sup>「同門とは亀井門なるべし」との山田氏のメモあり。

左間の光明院にあったという。采蘋はこの人たちの墓を訪ねたのかもしれない。洲崎では他に養老寺というお寺にも泊まっている。洲崎村から伊戸村に向かい、黒川隆圭、友次朗孝政を訪ね、圓光寺や、洲崎大明神の別当である吉祥院にも足を伸ばしている。かつて大沼枕山も吉祥院<sup>31</sup>に泊まったという。<sup>32</sup>洲崎の先、坂田村では西方寺を訪ね、又名主の海老原市朗左衛門を訪う。川名村では飯田三郎兵衛正賢、飯田新兵衛を訪ね、そこから犬石村に出て、名主の嶋田理兵衛を訪う。嶋田家は医者としても有名。ここから南下して漁港のある布良村に到り豊崎藤右衛門延治家か小谷吉右衛門伊親家<sup>33</sup>に宿ったと思われる。星巖や枕山の詩にも布良や洲崎を詠んだ詩があり、采蘋も同じ人々を訪ねたようである。

- 18、「遊海潮寺 号尾浦山」<sup>34</sup>七言絶句  
半島を回り根本に到り、名主の森周蔵氏を訪ねた後、海潮寺（現海福寺）に宿泊している。尾浦山海福寺は山を背にした静かな場所にあり、采蘋の詩からその情景は伝わってくる。  
根本から川下村に早川古右衛門、号松鱗を訪い、原田村の行方早人を訪ねる。青木村で医者を開業していた鈴木東海に会う。
- 19、「名倉浦施網」七言絶句  
鈴木東海は島崎村の里正行方平左衛門の妹の子で、館山の医者鈴木正立の長男。名は才助。江戸で医学を学び、帰郷してから、母の生家に近い青木村で開業し、近隣の子弟に漢学を教えていた。東海27歳であった。東海には未刊の「東海詩集」があるが未見。その中に「燼月十九日、同采蘋觀濤 茁齋好海、乘興夜漁、還共分韻」とあり、この詩は十二月十九日に、東海らと連れだつて夜漁に行った後に詠んだものとわかる。

ここに出てくる觀濤と茁齋は原村の人で、東海の友人である。佐野觀濤、字は有道、元治は通称か。吉田茁齋、字は之義。

- 20、「探梅」七言絶句  
この詩もおそらく東海や彼の友人たちと出かけた時に詠んだと思われる。青木村、島崎村には長らく滞在した模様である。
- 21、「歳暮書懷」七言律詩  
旅先の暮れの述懐である。東海の寓居か行方氏の宅に泊まっていたと思われる。「有客 兩三慰孤寂 幾回来往話燈窓」とあり、東海たちが毎晩訪ねてきて話してくれるので、孤独がまぎれると詠んでいる。
- 22、「遊野島」七言律詩  
野島崎は房総半島の南端で、現在は灯台が立ち、観光名所となっている。采蘋も東海や東海の友人に案内されて岬を訪れたのであろう。ここは35番目に見る詩で明らかのように、十九年前にも訪れた場所である。
- 23、「次韻木東海見贈」七言絶句二首  
この詩の最後に「于時鈴木東海寓 行方氏本宅故及」とあることから逗留先は東海寓居から行方平左衛門氏の本宅に移ったようである。
- 24、「弘化五年春壬正月 元旦」七言絶句三首  
異郷に在って新春を迎え、故郷の親を想う。しかし、「猶作東隅觀国賓」と喜ぶ。また、「蔵奇樓下蔵丹釀 占得風流賢主人」と風流な賢主人は秘蔵の酒をふるまってくれた。「蔵奇樓」は、山田氏によれば行方氏の書齋であるとのこと。弘化五年の正月は行方氏本宅で迎えたと思われる。
- 25、「疊韻和木東海」七言絶句三首  
詩中に「君是纔迎廿七春」とあることから、東海の年齢が知れる。絶句三首は息子のような東海の将来に対して助言や励ましの言葉をかけている。
- 26、「雨中遊神余」五言律詩  
神余は白浜から館山に向かう山中にある。おそらく出張教授を頼まれ、行方家より出

<sup>31</sup> 現在は洲崎神社となっている。

<sup>32</sup> 脚注14に同じ

<sup>33</sup> 神田屋は現存しており郵便局を営んでいる。

<sup>34</sup> 山号を尾浦山という

- かけたと思われる。あちこちで酒宴に招かれ、「自笑虚名噪」と詩にある。
- 27、「贈善長翁」七言絶句  
神余では金丸六右衛門と和貝大作に会う。大作の号が善長である。「閑談一夜春風坐」とあるから翁に招かれて宿泊したのかも知れない。
- 28、「客中送客」七言律詩  
この詩と次の二首はどこで詠んだものかは不明。野島崎の行方氏滞在中に詠んだものである。
- 29、「早春遊望」七言絶句  
「早春遊望」の下に十日とあるので一月十日に作った詩とわかる。
- 30、「春夜花下獨酌」<sup>35</sup>七言絶句  
上の二首と同様野島崎の行方氏滞在中に詠んだものと思われる。
- 31、「留別行方氏」七言絶句  
行方家を辞する時が来た。「遠別已經十八年」と、以前にもここに滞在したことを示す。行方兵左衛門は大庄屋であったから長期の滞在が許されたのであろう。<sup>36</sup>そればかりでなく行方氏と采蘋の交友の深さを物語っている。
- 32、「別木東海」  
行方氏に別れを告げ、東海、茁齋、観濤と白浜滞在中に共に遊び、また酒宴も共にしたのであろう若者たちとも別れを惜しむ。
- 33、「別吉田茁齋」七言絶句  
同上
- 34、「同佐野観濤」七言絶句  
同上
- 35、「早春発村」五言律詩  
長逗留の後、別れを惜しみながら「留連応有限 吾亦踏春行」と自らをせきたてて島崎村を後にした。
- 36、「予十九年前遊野島作」七言律詩  
十九年前に野島崎に遊んだ時に作った詩を思い出して再現したものと思われる。詩の内容からは、三十代の人生を謳歌しているエネルギッシュな采蘋の姿が伝わってくる。
- 37、「布帛」五言絶句  
行方氏に別れを告げた後、下澤の佐野真亮に会い、白子（現千倉）では佐野屋弥助を訪ねている。ここには房州台場の梅方岡陣屋があったという。又南三原にも立ち寄っている。  
この詩はこの間に詠んだものと思われる。
- 38、「重宿海発山自性院」七言絶句  
海発（現南房総市和田町）の臨済宗自性院には19年前も宿泊している。星巖夫妻もここに宿泊した可能性が高いと鶴岡氏は言う。
- 39、「春雪酬保田綉齋」七言絶句  
和田村の保田綉齋は字を子権、名を衡といった。近隣の子供たちを教え、その住居跡は医者屋敷と呼ばれていたという。<sup>37</sup>  
このほか和田村では里正の庄司五朗左衛門、嶋村屋弥助、八代市兵衛、泉屋林兵衛、白河屋又八などを訪ねている。
- 40、「二睡圖」五言絶句  
和田村で二睡圖を見て作ったと思われる。
- 41、「示保田詩盟」七言絶句  
保田綉齋に贈った詩である。春の寒さが続いていて出遊を阻まれていたが、今朝は暖かくなったので、又出かけることにしよう。
- 42、「答同」七言絶句  
保田綉齋の詩に答える詩と思われる。
- 43、「天面途中贈綉齋」五言絶句  
天面（現鴨川市太海）に向かう途中で、再び保田綉齋に一首を贈っている。  
天面では里正の裕九郎宅に泊まったようである。
- 44、「杏林齋寓居 雨窓寂寂独坐無聊偶閱主人之稿遂歩其韻」七言絶句九首  
波太（現鴨川市太海）の医者阿部玄節は平久里の医者加藤霞石の門人で、号を蓬州、

<sup>35</sup>井上本は「春夜花下飲」となっている。

<sup>36</sup>地元の人によれば、行方氏は代々訪問者を歓待し、また困った人を助ける家柄であったという。

<sup>37</sup> 前田氏の論文参照。

- 字は淳徳といい、住居を杏林堂医院といったことから杏林齋とも称したようである。
- 45、「杏園席上贈主人」七言絶句  
同じく杏林齋に宛てた詩。風光明美な波太あたりでしばらく滞在したようである。
- 46、「波太」七言絶句  
波太には治承四年（1180）、石橋山の戦いに敗れた源頼朝が安房に逃れた際、平野仁右衛門に助けられ、この島で平家軍から一時身を隠したといわれる仁右衛門島があり、星巖夫妻も訪れてここで詠んだ詩を残している。  
波太を後にした采蘋は、磯村の某氏を訪ね、前村で木村周齋、東條村（現鴨川市）で高階氏や亀田元、字は徳叔、号を皎齋という人に会っている。
- 47、「送別澤柳王齋」七言絶句  
澤柳王齋は俗称を友之助といい、加賀の人とある。以前にも会ったことがあり、ここで会い別れて、又いずこで再会できるのだろうかと詠じている。
- 48、「暮春即興次韻」七言絶句  
春の終わりの東條村か内浦あたりで詠んだものであろう。
- 49、「将遊赤城沮雨」七言絶句三首  
東條村の後は内浦（現鴨川市内浦）で渡邊喜内を訪問している。赤城もこのあたりの地名か。
- 50、「雨中市坂書懐」五言律詩  
市坂は小湊（現鴨川市内浦）から植野に至る山路である。小湊には日蓮聖人生誕の地誕生寺があり、星巖の詩にも「小湊」「市坂」などの詩が見える。<sup>38</sup>
- 51、「新晴植野採蕨」七言絶句二首  
上総に入り、植野村（上野・現勝浦市）では市川左仲、名を冑仲、字を篤徳、号を梧桐という人を訪れた。ここで蕨取りに興じた時のもの。
- 52、「湧金楼席上贈翠齋」七言律詩  
翠齋はだれか不明であるが、翠齋の家である湧金楼に招待されて詠んだものであろう。植野村あたりと推測される。
- 53、「春日雑詠」五言絶句四首  
植野村から興津に出た采蘋は相寿院に泊まったと思われる。春の日の情景を詠んだ四首は興津あたりでのものと思われる。
- 54、「勝浦沮雨」七言絶句  
勝浦では里正の熊切弥左衛門に宿り、雨に阻まれ逗留したものと思われる。翌日は晴れて、勝浦を出て、岩切で武岡泰充、字は通孝という人に会い、六軒町（現夷隅郡御宿）では鶴澤勇吉を訪ね、久保村（現夷隅郡）で岩瀬五朗左衛門を訪ねている。
- 55、「春盡前一日訪山田村里正鈴木謙齋次韻」七言絶句二首  
久保村から山田村（現勝浦市）に出て、里正鈴木謙齋を訪う。謙齋は名を凶書と言ひ、天然楼とも号した。暦の上では春の終わる前日、謙齋を訪ね、二首の詩を贈っている。又山田村では鈴木慎兵衛という人にも会っている。
- 56、「春盡」七言律詩一首、七言絶句一首  
山田村から荻谷村（現夷隅郡）の糶谷鈴木伝右衛門を訪ね、次に今関村（現夷隅郡）の田丸健龍を訪う。次に臼井村（現夷隅郡岬町）の南部藩士堀江東民を訪ね、長者町では吉田崇軒に会っている。
- 57、「戲次韻」七言絶句  
長者町から一ノ宮に行く途中、網田（現長生郡一ノ宮町）の里正高原五朗右衛門を訪ねた。このあたりで詠んだものか。また網田では八百屋長四郎という人にも会っている。
- 58、「和田朴齋」七言絶句二首  
和田朴齋もこのあたりの人であろう。
- 59、「贈鈴木氏」七言古詩  
再び山田村の鈴木謙齋を訪ねたか、あるいは逗留していたものか。鈴木家を去る時の詩である。「憶昨来遊日 寓君迎青陽」と、

<sup>38</sup>脚注 13 参照

- 19年前にもここに泊まったと思われる。
- 60、「一之宮題旅店壁上」五言絶句  
鈴木家を辞し、上総一ノ宮に出て、そのの旅店壁上に「過客不須速 来遊為問奇」と書き、後から来る旅人にメッセージを残している。
- 61、「沮雨」五言絶句  
一ノ宮の旅宿で雨に阻まれた。波の音を聞いて晴雨を占う。「今夜濤声転 明朝定快晴」と明日は晴れることを期待する。
- 62、「訪人不遇題壁上」七言絶句  
遠く西国の地からはるばる訪ねてきたが、知人は留守で会うことが出来なかった。仕方なく壁に一首を書き残す。
- 63、「呼酒」五言絶句  
旅の途中、酒を題材にした詩。「詩思有時渴 呼杯醉裏哦」どこかの旅宿で雨に阻まれ、お酒を飲みながら作吟しているのだろう。
- 64、「客舎沮雨」五言絶句  
旅宿で雨に阻まれ、故郷に帰った夢を見たいと思うのに、眠ろうとしても気が益々冴えて眠れないと嘆いている。
- 65、「夢中還郷」五言絶句  
故郷に帰った夢を見た。年老いた親が病氣と聞き、旅の費用を捻出するためもあって、この旅に出たと思われる。親を想う気持ちは忘れたことがないとたびたび詩にも詠じている。
- 66、「思郷」五言絶句  
旅も終りに近づき、望郷の念は押えがたく「五十親猶健」「浩浩有帰心」と詠んでいる。
- 67、「即興」(五言が二句のみ)  
一ノ宮から四天木に行く途中、一ッ松(現長生郡長生村)で、里正の森権右衛門宅に泊まったと思われる。この詩は五言絶句の書きかけで、途中でやめてしまっている。このあたりでの作か。
- 68、「五清堂席上」七言律詩  
四天木(山武郡大網白里町)の斉藤四郎右衛門を訪ねる。四郎右衛門は字を公和、拳石と号し、又の名を五清堂といった。自宅

は大洋庵と呼ばれ、土郷でこのあたりの大網元であった。星巖もここに宿泊している。四天木ではもう一人、斉藤成憲字は伯章、滄海と号す人にも会った。「緑樹森森晝亦涼」と詩に見え、季節は既に夏となっていた。五清堂に別れを告げ、上総を北上し江戸に帰ったと思われる。

「東遊漫草」にはこの詩の後にさらに三首の詩を書き連ねているが、人名録は四天木が最終地となっている。

### 3.3 人名録について

「東遊漫草」の稿の最後には、この旅で出会った人々の名が地名ごとに記録されている。これらの人々は詩に現れない人々も多く含まれている。この表によって采蘋の旅程をかなり明確に辿ることが出来るので、以下にそのリストを示す。

地名	名前	字	号	その他
木更津	遠山元水	貞伯		浅川門人
	近藤兼吉			岡部藩士 浅川門人
	生澤良仙			医者
富津	織本嘉右衛門			
	糟谷直輔			
	磯崎永助			
	小松貞吉			江戸人
	稲次作左衛門			菓屋
天神山 湊	井上宗且(宗瑞)			医者
百首	乃木文迪			医者
元名村	岩崎泰輔	宜民	禮斎	
保田	川崎温平			善兵衛
勝山				旅宿
市部	小澤政右衛門			里正
平久里	加藤濟	世美	霞石	蓑丘招隱
谷向	鈴木齡助	彦之	松塘	邦(名)
館山				宗真寺
長須賀	池田金七		琴嶺	池田屋

				里正
園村	景山与左衛門		含翠	京(名) 里正
片岡村	小柴新右衛門			
寶貝村	本橋次右衛門		文溟	璞(名)
安東村	相川十左衛門		義長	
	宮澤胖	廣甫	竹堂	丹波藩士
	西村幸内		晴坡	忍藩士
	水谷豊作		翼斎	忍藩士
二子村	谷崎元益	廉夫	栗園	医者
鶴ヶ谷	塩野専蔵		苔園	忍藩士
洲崎村	渡邊仁右衛門			里正
	池田玄章	士揺	関谷林	貞(名)
	養老寺			眞識
伊戸村	黒川隆圭			
	吉祥院			海龍(名)
	圓光寺			通仙(名)
	黒川友次朗	孝政		
坂田村	西方寺			仙峯(名)
	海老原市郎左衛門			里正
川名村	飯田三郎兵衛	正賢		
	飯田新兵衛			
波左間		新兵衛		糸我屋
布良村	豊崎藤右衛門	延治		
	小谷吉右衛門	伊親		神田屋 <sup>39</sup>
犬石村	嶋田理兵衛			
根本	森周蔵			
	海潮寺		尾浦山	恭龍
川下村	早川古右衛門		松鱗	
原田村	行方早人 <sup>40</sup>			福本屋
青木村	鈴木才助		東海	館山人 (医)
原村	佐野元治	有道	観濤	亀屋
	吉田苗齋	之義		
神余村	金丸六右衛門			
	和貝大作		善長	

嶋崎村	行方兵左衛門 41			里正
下澤	佐野真亮			
白子	佐野弥助			佐野屋
南三原	佐々圭悦			
和田村	保田綉斎	子権		衡(名)
	庄司五朗左衛門			
	嶋村弥助			嶋村屋
	八代市兵衛			菜種屋
	泉林兵衛			泉屋
	白川又八			白川屋
天面	裕九郎			里正
波太	安部玄節	淳徳	蓬州	杏林斎
磯村	佐野逸民			
前村	木村周斎			
東條	高階	子	三友	
	亀田元	健叔	皎斎	
内浦	渡邊喜内			
植野村	市川左仲	篤徳	梧桐	宜仲(名)
	市川左仲	仲義	龍山	義生(名)
	紫水鼎	梅餽		
興津	相寿院		假稽	
	東光寺			天嶺
勝浦	熊切弥左衛門			里正
岩切	武岡泰充	通孝		
六軒町	鶴澤勇吉			
久保村	岩瀬五朗左衛門			
山田村	鈴木図書	子憲	謙齋	天然楼
	鈴木慎兵衛			
苅谷	鈴木伝右衛門			糶屋
今関村	田丸健良			医者
臼井	堀江東民			南部藩士
長者町	吉田崇軒			
網田	高原五郎衛門			里正

<sup>39</sup> 神田屋は神田氏で小谷家とは別家。<sup>40</sup> 原田村行方家は代々三左衛門と呼ばれている。<sup>41</sup> 嶋崎村行方家は屋号を川端、また藤右衛門とも呼ばれている。行方兵左衛門の妹が鈴木東海の母である。

	長四郎			八百屋
一ッ松	森権右衛門			里正
四天木	斉藤四郎右衛門	公和	拳石	五清堂 大洋庵
	斉藤成憲	伯章	滄海	

### 3.4 旅程図

人名録及び詩稿を本に采蘋の訪問先を地図上に示した。



### 4. おわりに

「東遊漫草」中の詩と、旅先で訪ねた人々を追って見て来た。采蘋は弘化四年（1847）から五年の夏にかけての約一年近くの房総旅行中、精力的に人々に会い、また多くの詩の応酬をし、百首近い詩を残した。このことは、采蘋の詩人としての業績を物語るだけでなく、彼女の人間性をも色濃く表現している。

この旅のコースは天保十二年（1841）の梁川星巖

の房総遊歴とは逆のコースを辿っているが、ほぼ重なっている。しかし、星巖が訪ねなかった多くの人々が采蘋の人名録には見られる。このことは、二回の房総旅行によって采蘋の独自の人脈を開拓したことで、房総における采蘋の名声が広まっていたことを物語っている。実際に江戸では天保八年（1837）に刊行された『現存雷名 江戸文人寿命附』では他の女性詩人の中で最高の得点を得る評価が為されていた。しかしその評価は采蘋の詩中では「何料虚名達久聞」「笑我厚顔噉名客」という謙遜の詩句となって表れている。ともかく江戸における采蘋の名声は江戸と房総を往来する文人たちによって房総にもたらされた。幕末の房総には梁川星巖の門人の鈴木松塘や安積良斎の門人の鈴木東海、太田錦城に学んだ平井世雄などが帰郷し、名主として或は医者として開業の傍ら、漢学塾を開いていた。江戸から近く風光明媚な房総には山本北山の門人や梁川星巖の門人が次々と訪れている。大沼枕山も20歳のころより毎年訪れている。このような子弟の交流は滞在した家族の文化意識を高めるだけでなく、地域の子弟の文化水準をも高めるのに一役を担った。采蘋の影響を見れば、鱸松塘の娘采蘭はその名を采蘋と紅蘭からとり、後に父を助けて「七曲吟社」で多くの女弟子を教えるに至った。二回にわたる采蘋の房総の旅は、采蘋の詩囊を肥やすだけでなく、房総地方の青年たちにとっても「采蘋先生」の影響は少なくなかったのである。

以上見て来たように、「東遊漫草」によって、幕末の房総半島には遊歴の漢詩人を受け入れる裕福な知識人層が存在していたことを知るのである。

本稿では、紙面の関係上詩の題のみを紹介するに留めた。詩の本文は『日本儒林叢書』中の「采蘋詩集」を参照されたい。

(Received: May 31, 2012)

(Issued in internet Edition: July 1, 2012)